

中世坪江上郷と前谷遺跡

中世の坪江上郷⁽¹⁾の中で、前谷遺跡の周辺がどのような環境であったかを述べたうえで、前谷遺跡について考察していく。

前谷⁽²⁾は、興福寺大乘院門跡領の荘園である坪江荘の坪江上郷の一部に比定されている。この坪江上郷に属している地域の遺跡については、乗兼・坪江遺跡が調査されており、貿易陶磁器や天目が出土している点や遺構の検出状況から、坪江上郷の中心である可能性が高いことが指摘されている⁽³⁾。また、前谷遺跡と乗兼・坪江遺跡ともに、同型式の白磁(第15図7)が出土しており、同時代の遺跡であることが指摘できる。

次に、寺院や経塚など宗教的環境に着目すると、本遺跡の周辺は天台宗の影響下にあったと考えられる地域である。本遺跡の南東側に位置する松竜寺⁽⁴⁾は、養老年間(717～724年)に帝釈天を祀るために泰澄によって開かれたと伝えられる元天台宗の寺院である。本遺跡から東に約2kmに位置する、あわらし清滝庵寺からは、安元2年(1176年)の記年銘と「河内」の地名を記された経筒(第19図、第3図・第1表33)⁽⁵⁾が発掘されている。清滝地区の南方には、白山信仰の拠点であり13世紀に延暦寺の末寺となった豊原寺跡がある。清滝に経筒が埋納された理由については、白山から南下すると、標高576mの剣岳に達し、剣岳から西へ平野を目指して下りてくると、平野部との境に清滝が立地しているという推定がなされている⁽⁶⁾。松竜寺の裏手には、「朝倉始末記」にも記述されている、永正元年(1504年)から同4年(1507年)にかけての一向一揆と朝倉氏の主戦場となった帝釈堂があったとされ、この戦で松竜寺とともに消失している。こうした周辺環境から、13世紀前後から16世紀にかけての前谷遺跡周辺は、天台宗の影響下の地域であったと考えられる。



第19図 経筒拓本 (S=1/3)
『金津町の文化財』から

当時の交通路⁽⁷⁾については、坪江から、中川、前谷を経由し熊坂、牛ノ谷へと抜けるルートが、越前－加賀間を通る街道の一つであった。また、柵から前谷の裏手を通り、権世市野々を経由し風谷峠を越えて現石川県山中村に至る街道がある。それゆえ、本遺跡が位置する地域一帯は、越前と加賀間を結ぶ交通の要衝と言える。前谷が面している街道が、当時の越前と加賀間の人とモノの流通路であり、そこに貿易陶磁器も含まれていて、貿易陶磁器や天目などの奢侈品を入手可能な環境であったことと、それらを入手できる社会的に高位な人々(寺院関係者か荘園関係者)の存在が、前谷遺跡とその周辺にあったのではないかと考えられる。

註

- 1 清田善樹1993「河口・坪江荘」『講座日本荘園史 6 北陸地方の荘園・近畿地方の荘園 I』吉川弘文館
- 2 金津町教育委員会編1985『金津町坪江の郷土史』金津町教育委員会
- 3 中川佳三編2006『乗兼・坪江遺跡』福井県教育庁埋蔵文化財調査センター
- 4 金津町教育委員会編1985『金津町坪江の郷土史』金津町教育委員会
- 5 金津町文化財保護委員会編1982『金津町の文化財』金津町教育委員会
- 6 伊藤純1989「福井県金津町出土の経筒をめぐって－十二世紀の越前と河内－」『地方史研究』217、地方史研究協議会
- 7 福井県教育委員会編2001『歴史の道調査報告書第1集』福井県教育委員会